

令和5年度前期常設展

いわき総合図書館開館15周年記念

常設展の歴史

はじめに

当館は、平成19(2007)年10月25日に開館し、15周年を迎えました。地域資料展示コーナーにおいて、開館以来、常設展を年に2回の頻度で開催しており、令和5(2023)年6月11日まで開催していた前回の常設展「いわきの図書館一はじまりから今へ」で30回を数えました。

31回目の今回は、開館15周年を記念して、これまで開催した様々な常設展を9つのテーマごとにまとめ、当時の裏話も織り交ぜながらその歴史を振り返ります。

本展示をとおり、当館の常設展の歩みや市立図書館の役割について、知っていただく機会となりましたら幸いです。

合併・街づくり

いわき地域の市町村合併に関する常設展は、5つありました。昭和時代の自治体合併やそれによって誕生した市町村について、様々な切り口で紹介しています。

まず、平成20(2008)年度に開催した「**昭和の大合併 ～石城郡からいわき市までの変遷～**」です。この展示は、「昭和の大合併」と言われている昭和30(1955)年頃の大規模合併で誕生した、旧5市(平市・磐城市・勿来市・常磐市・内郷市)と、それらが合併して誕生したいわき市、また、それぞれの市章について、自治体要覧や絵はがき等と共に紹介するものです。

この展示を企画するきっかけとなったのは、旧自治体の市章について知りたいという、当館に寄せられた問い合わせでした。市民の関心も高く、展示コーナーでは当時を懐かしみ談笑する姿も見られました。



「昭和の大合併」展示の様子



「写真でみるいわき市誕生 その2」
展示の様子

次に、2回にわたって開催した「**写真で見る いわき市誕生**」です。平成28(2016)年度後期の1回目は、いわき市制施行50周年を記念した同名の企画展(平成29(2017)年1月15日まで開催)を、好評につき、常設展に場所を移して開催したものです。

平成29年度前期の2回目は、副題を「**昭和40年代 平(現いわき) 駅前の賑わい**」として、いわき市が昭和41(1966)年に誕生したことにちなみ、昭和40年代の平の町並みや出来事についての写真を展示しました。

続いて、色鮮やかな鳥瞰図^{ちようかんず}をメインにした展示を2回にわたり開催しました。鳥瞰図とは、上空から斜めに見下ろしたように描かれた図のことで、展示した鳥瞰図は、それぞれの自治体の観光パンフレットに収録されているものを拡大したものです。

平成29(2017)年度後期は、「鳥瞰図と地図に見る『平市』—平市誕生80周年・いわき市誕生^{ぜんやたん}前夜譚—」と題して、旧自治体のうちの平市について、2枚の鳥瞰図や地図、写真等と共に紹介しました。

平成30(2018)年度前期は、「鳥瞰図に見る『合併前のいわき』—磐城・勿来・常磐・内郷・四倉—」と題して、旧自治体のうちの磐城市・勿来市・常磐市・内郷市・四倉町について、それぞれが描かれた鳥瞰図と観光パンフレット等を展示しました。



「鳥瞰図と地図に見る『平市』」展示の様子

●● 歴史・文化(近世)

いわき市の近世の歴史や文化に関する展示は、3つ開催しています。

平成26(2014)年度前期は、前年度に開催した企画展「澤村勘兵衛生誕400年 絵図でみる小川江筋^{おがわえすじ}」を再構成した「小川江筋とその流れ」を開催しました。

小川江筋は、小川町から四倉町まで総延長約30kmに及ぶ、江戸時代初期に作られた用水路です。その水は、農業用水・水道水として利用されています。小川江筋の開削に尽力した澤村勘兵衛を祀る澤村神社(平下神谷)には、小川江筋の維持・管理のために描かれたと伝わる「小川江筋繪図^{えづ}」が残されています。

この展示では、小川江筋の開削の歴史や澤村勘兵衛等について紹介し、5階ソファコーナー脇には特設コーナーを設置して、「小川江筋繪図」のほぼ原寸大パネルを展示しました。



「小川江筋繪図」ほぼ原寸大パネル展示の様子



「じゃんがら念仏踊りの歴史展」展示の様子

平成28(2016)年度前期は、「じゃんがら念仏踊りの歴史展」を開催しています。この展示は、市内を中心に分布・伝承されている「じゃんがら念仏踊り」のルーツや明治の禁止令等の歴史、各地区の「じゃんがら念仏踊り」の様子等を紹介するものです。

展示ケースで囲った中心部には、「じゃんがら念仏踊り」で使用する太鼓と鉦^{かね}、遠野和紙製の「じゃんがら和紙人形」を展示しました。

令和2(2020)年度前期は、小川江筋を開削した時代に磐城平藩を治めた内藤家の人物や関連する出来事について紹介する「磐城平藩内藤家の人々」を開催しました。

この展示は、同時開催した企画展「内藤風虎と『桜川』—磐城平藩と俳諧—」とリンクした内容になっていました。常設展では内藤家の人物について、主に政治面から概略をとらえる展示を行い、企画展では、磐城平藩内藤家三代藩主・内藤風虎(義頼)について、編さんを指示した俳諧選集「桜川」を中心とした、文化面での功績を紹介しました。

●● 歴史・文化（近現代）

いわき市の近現代の歴史や文化に関する展示は4つ開催しています。

平成20（2008）年度前期は、記念すべき第1回目の常設展「大正・昭和の平～広告からたどるレトロモダンな街なか散歩～」を行いました。この展示は、大正時代から昭和時代初期にかけて、いわき地方で発行された新聞に掲載されている商店の広告をもとに、当時の平の流行・風俗・街並み等を紹介するものです。

平成25（2013）年度前期は、「片寄平蔵生誕200年記念事業『燃える石・燃える平蔵』いわきの炭鉱展」と題して、「常磐炭鉱」や「古河好間炭鉱」等の会社概要や営業報告書、また、いわき地域における石炭の発見者といわれる片寄平蔵の関連資料等を展示し、江戸時代末期から約130年間にわたっていわき地域の産業の中核を担った炭鉱について紹介しました。

平成27（2015）年度前期は、同年が第二次世界大戦終結から70年にあたることから、「戦後70年、伝えるいわきの戦災」を開催しました。この展示では、第二次世界大戦の概略と共に、その頃のいわき地域の様子や受けた被害等について紹介しました。

通常は、常設展に関連する本として館内閲覧用の本を常設展示コーナーに設置していますが、この展示では、地域資料や一般書の別なく、第二次世界大戦に関連する貸出用の本も設置しました。展示ケースの隣に、閲覧席を設置したことで、関連する本を真剣な面持ちで熟読する方も多く見られました。



「戦後70年、伝えるいわきの戦災」展示の様子



「地元紙からみる1964年東京オリンピック・パラリンピック」展示の様子

令和3（2021）年度前期には、同年に東京オリンピック・パラリンピックが開催されたことにちなみ、「地元紙からみる1964年東京オリンピック・パラリンピック」の展示を行いました。この展示では、昭和39（1964）年に開催された前回の東京大会の際のいわき地域の様子や、活躍した選手等について、『いわき民報』・『常磐毎日新聞』・『福島民報』・『福島民友』の当時の記事をもとに紹介しました。

この展示の会期中の令和3（2021）年8月7日から9月30日までの期間に、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響で、いわき市立図書館全館が休館したため、当初、10月24日までの開催予定を約1ヶ月間延長し、11月28日までとしました。

●● さんえん 三猿文庫

三猿文庫の資料を主題にした常設展は、4つありました。それぞれに、普段は温度・湿度を管理した書庫に収納している貴重な資料を見ていただける機会となりました。

平成21（2009）年度には、2回にわたり「宮武外骨展—三猿文庫コレクションより—」を開催しました。

三猿文庫主・諸橋元三郎は、「宮武外骨氏著作目録」を作成し、明治時代から昭和時代初期にかけて活躍したジャーナリスト・宮武外骨の刊行する雑誌を積極的に収集していました。

このコレクションの中から、前期では、『此花』や『スコブル』等の雑誌を中心とした資料、後期の「繪葉書世界編」では、雑誌『滑稽新聞』の定期増刊『繪葉書世界』を展示しました。



「宮武外骨展—三猿文庫コレクションより—」展示の様子

平成 22 (2010) 年度後期は、同年が、諸橋元三郎が三猿文庫の資料収集を始めた大正 9 (1920) 年から 90 年にあたることを記念して、「いわき郷土研究の先駆者・諸根樟一と三猿文庫」を開催しました。この展示は、諸橋元三郎が支援をした、いわき地域の郷土史家・諸根樟一と、雑誌、新聞、著作といった諸根樟一の出版物、そして、三猿文庫との関わりについて紹介するものです。



「郷土雑誌の逸品たち」展示の様子

当初、平成 23 (2011) 年 3 月 27 日まで開催する予定でしたが、3 月 11 日に発生した東日本大震災の影響で、図書館内も大きな被害を受け、全館休館となってしまいました。

そして、令和元 (2019) 年度後期には、「三猿文庫開設 100 年 記念 郷土雑誌の逸品たち」を開催しました。この展示では、三猿文庫所蔵のいわき地域で出版された貴重な雑誌の数々や、その出版に関わった人々等を紹介しました。展示した雑誌は現物を使用したため、触れることはできないものの、それぞれの雑誌に使われた紙の質感の違い等も感じていただける展示となりました。

さんえん もろはしもとさぶろう 三猿文庫と諸橋元三郎

三猿文庫は、諸橋元三郎 [明治 30 (1897) 年—平成元 (1989) 年] によって開設された文庫です。諸橋は、大正 9 (1920) 年、家業の「釜屋」(いわき市平五町目) の会計を担当するかたわら、地域に密着した資料を集め、「三猿文庫」と名付けました。

文庫名は、「見ざる・聞かざる・言わざるの三猿の教えは、逆説的には大いに見分をひろめ、知識を涵養すべきであるという哲理」であることに由来し、その特徴は、いわき地域の出版物や全国の近代雑誌創刊号、宮武外骨や山村暮鳥の著作物といった多種多様な分野にわたっていることにあります。

平成 14 (2002) 年、三猿文庫資料はいわき市に寄贈され、平成 19 (2007) 年度に図書館の所管となり、開架可能な地域関係資料を提供する三猿文庫コーナーを、いわき資料フロアに設置して、現在に至っています。

みやたけがいこつ 宮武外骨

宮武外骨は、明治時代から昭和時代初期にかけて活躍したジャーナリストです。

慶応 3 (1867) 年、現在の香川県で裕福な旧家に生まれ、亀四郎と名付けられました。明治 17 (1884) 年に、その名前を「亀は外骨内肉の動物である」として「外骨」と改名します。

宮武は、多くの雑誌や新聞を出版しますが、反官的な風刺を行ったことで、出版物の発売禁止や投獄等の措置を受けました。

関東大震災後は、明治時代の新聞や雑誌の資料的価値に着目し、それらの収集・保存に尽力します。その活動は、東京帝国大学明治新聞雑誌文庫の創設につながりました。

もろねしょういち 諸根樟一

諸根樟一は、明治 26 (1893) 年、川部村 (現いわき市川部町) に生まれた郷土史家です。

大正 11 (1922) 年頃、平町で、自らの蔵書を元にして古書店「郷土社」開き、大正 12 年には『郷土文化』を創刊しました。この『郷土文化』存続のため、知識階級や著名人に働きかけ、「郷土文化会」を結成しました。その会員の中に、諸橋元三郎の名前もありました。諸橋は、その後の諸根の著作出版等に援助を行っています。

昭和 3 (1928) 年には、12 月 30 日に発生した火災で郷土社が類焼し、それにより、『福島県政治史 中・下巻』を始めとする未刊行の原稿等が焼失してしまいました。諸根は、印刷所にあったため焼失を免れた『福島県政治史 上巻』等を出版し、昭和 5 (1930) 年、京文社に職を得たこと等から上京しました。

その後も著作の出版を続け、昭和 26 (1951) 年 9 月に亡くなりました。

●● 学校

平成 24 (2012) 年度は、学校に関する展示を行いました。

前期は、「**小学校教科書のあゆみ展～明治から昭和（戦前）～**」と題して、学制の発布によって近代教育が行われるようになった明治初期から昭和時代戦前までの、市内の小学校で使用された教科書の変遷を紹介する展示を行いました。

後期は、「**青春の足跡展—高校の出版物—**」と題して、明治時代後期から昭和時代までに発行された、旧制中学校や高等女学校を含む市内の高校の出版物を紹介する展示を行いました。

「小学校教科書のあゆみ展」では、国語や算数など各教科の教科書、「青春の足跡展」では、生徒会誌・同窓会誌・部誌（文芸部等）といった、各学校等の出版物の現物を展示しました。普段は公開していない資料の数々を紹介する良い機会となりました。



「小学校教科書のあゆみ展」展示の様子

●● 出版

平成 23 (2011) 年度は、出版に関する展示を続けて開催しました。

この年は、3月11日に東日本大震災が発生し、いわき市立図書館も大きな被害を受け、市内全館で休館を余儀なくされました。いわき総合図書館の復旧工事が完了し、開館したのは同年5月30日のことでした。

開館に合わせて開催されたのは、「**戦後いわき文芸出版の先駆け 氾濫社と真尾倍弘・悦子**」です。この展示は、昭和 31 (1956) 年にいわき市で出版社「氾濫社」を立ち上げ、文芸誌の編集・発行や地域の人々の随筆・詩集・句集等の印刷を行った、詩人・真尾倍弘と作家・真尾悦子夫妻について紹介するものでした。

後期は、「**いわきの地域新聞と新聞人**」と題して、明治時代後期から昭和時代にかけていわき地域で出版された数々の新聞や、それを出版した人物、新聞の出版をとりまく当時の情勢等を紹介しました。

展示した新聞は現物ではなく、デジタルデータを印刷したものでしたが、紙の劣化等で破れてしまった部分も丁寧に切り抜いて再現し、現物の雰囲気になづくように工夫がされています。



「戦後いわき文芸出版の先駆け 氾濫社と真尾倍弘・悦子」の展示物
左から、雑誌『月刊いわき』
・詩集『もぐらの歌』・雑誌『カルスト』

●● ましおますひろ はんらんしゃ ●● 真尾倍弘・悦子と氾濫社

真尾倍弘(詩人)・悦子(作家)夫妻と長女は、昭和 24 (1949) 年に平市(現いわき市)に移住してきました。昭和 26 (1951) 年には、『石城文化』を創刊します。

昭和 31 (1956) 年、新しく雑誌を創刊したいと考えていた倍弘は、詩友・三野混沌との話から印刷機を購入し、自宅で出版社「氾濫社」を立ち上げました。

翌年には、氾濫社より『月刊いわき』を創刊、また、地域の人々の随筆や詩集、句集等も印刷しました。昭和 37 (1962) 年、氾濫社は、住居を兼ねた建物が取り壊されることになり、継続できなくなりました。真尾一家は、転居先が見つからず上京することになりました。

●● 共催・協力

これまでの常設展の中には、他機関や団体との共催や貴重な資料を貸していただいた展示もありました。他機関・団体ならではの現物資料を展示することができ、迫力のある常設展になりました。

まず、平成 25 (2013) 年度後期の「**いわき考古学の黎明期—神谷作 101 号古墳を中心に—**」です。この展示は、いわき市教育文化事業団協力のもと、国指定重要文化財「**埴輪男子胡座像 (天冠埴輪)**」と「**埴輪女子像**」のレプリカを展示し、これらが発見された「**神谷作 101 号古墳**」を中心に、いわき市の考古学について紹介したものです。



「いわき考古学の黎明期」展示の様子



「東日本大震災 浜通りの記録と記憶 アーカイブ写真展」展示の様子

平成 26 (2014) 年度後期は、いわき明星大学 (現 医療創生大学) 復興事業センターとの共催で、多くの東日本大震災の遺物や写真などを展示する「**東日本大震災 浜通りの記録と記憶 アーカイブ写真展**」を開催しました。会期中に一部展示替えを行い、富岡町の震災遺物を展示したところ、期間延長の要望が寄せられたため、平成 27 (2015) 年 5 月 31 日までを予定していた会期を延長し、6 月 10 日まで開催しました。

また、この展示に関連して、平成 27 年 2 月 14 日に、いわき地域復興センター主催の講演会「**わたしが撮った 3.11—久之浜の記憶—**」を開催しました。

そして、平成 27 年度後期は、磐梯山ジオパーク協議会・福島県立博物館・磐梯山噴火記念館との共催で、東北で初めて「**日本ジオパーク**」に認定された「**磐梯山ジオパーク**」について紹介する「**磐梯山ジオパーク展～磐梯山ジオパークがつなぐ、大地と自然と人の物語～**」を開催しました。

この展示に関連して、ワークショップと講演会も行っています。平成 28 (2016) 年 1 月 31 日には、火山のメカニズム等を学ぶ実験と磐梯山の模型を作る子ども向けワークショップ「**磐梯山とジオパーク**」と、福島県内の火山や磐梯山ジオパークについて学ぶ大人向けの講演会「**福島県の 3 火山と火山防災とジオパーク**」を、同年 5 月 28 日には、磐梯山の噴火の歴史やジオパークとしての磐梯山の魅力等を学ぶ講演会「**磐梯山ジオパークの魅力大紹介!!**」をそれぞれ開催しました。



「磐梯山ジオパーク展」展示の様子

●● ジオパーク ●●

ジオパークとは、地球科学的に重要な地域やその景観を「保護」・「教育」・「持続可能な開発」という要素を全て含んだ考え方によって管理している、まとまったエリアのことです。ユネスコが定める様々な基準に基づいて、世界各国の地域が「ユネスコ世界ジオパーク」として認定されており、日本からは、10 地域 (令和 5 年 5 月現在) が認定されています。

この 10 地域と、「ユネスコ世界ジオパーク」の認定を目指す国内のジオパークで構成されているのが「**日本ジオパーク**」です。日本ジオパーク委員会によって、国内の 46 地域 (令和 5 年 5 月現在) が認定されています。常設展で取り上げた「**磐梯山ジオパーク**」は、この「**日本ジオパーク**」に含まれています。

●● 海

海に関する展示は、3つ開催しています。

平成 30 (2018) 年度後期は、港湾や工業、観光など様々な分野で重要な位置を占める小名浜の歩みをたどる「**資料と写真にみる小名浜の変遷**」を開催しました。福島県小名浜港湾建設事務所や国土交通省東北地方整備局小名浜港湾事務所に協力を依頼し、提供していただいた小名浜港に関する刊行物や写真を展示しました。

令和元 (2019) 年度前期は、明治 32 (1899) 年の初点灯から 120 年を迎えた塩屋埼灯台の歴史を紹介する「**資料から探る塩屋埼灯台の歴史**」を開催しました。



「資料と写真にみる小名浜の変遷」展示の様子

福島海上保安部や公益社団法人 燈光会塩屋埼支所、塩屋埼灯台 120 周年記念事業実行委員会より、初代・塩屋埼灯台のレンガや、塩屋埼灯台を舞台にした映画『喜びも悲しみも幾年月』の原作手記「海を守る夫と共に二十年」を掲載した雑誌等、貴重な資料を借受けて展示を行いました。

また、いわき七浜イケメンプロジェクトにも協力していただき、7人のキャラクターのうち、「豊間の灯台」ともいわれる塩屋埼灯台にちなみ、「豊間善灯」のほぼ等身大パネルを作製しました。総合図書館 5 階入口に設置し、写真撮影可としたことで、パネルと一緒に撮影する来館者の姿がみられました。



「資料から探る塩屋埼灯台の歴史」展示の様子

令和 4 (2022) 年度前期には、「**いわき七浜の海水浴場**」と題して、いわき市の海水浴場の沿革をはじめ、文学作品に登場した市内の海水浴場や、開催されたイベント等について紹介する展示を行いました。

市内の海水浴場は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響によって、令和 2 (2020) 年度から開設を見送られてきた中で、3年ぶりの開設となった令和 4 年度にこの展示を開催したことで、普段以上に新聞社等からの取材がありました。



「いわき七浜の海水浴場」展示の様子

●● インフラ・施設

市民の生活を支えるインフラや各種施設に関する展示も 4 つ開催しました。

平成 22 (2010) 年度前期は、同年 3 月 25 日の「いわき駅南口駅前広場」(駅前ペDESTロリアンデッキ 2 階の「イベント広場」とタクシープール脇の「多目的広場」の 2 箇所)の供用開始にちなみ、当館所蔵の新聞記事から、いわき駅前再開発の道のりの背景や駅前の移り変わりを紹介する、「**新聞にみるいわき駅前再開発**」を開催しました。

令和 2 (2020) 年度後期は、いわき市の沿岸部を縦断する道路が、大正 9 (1920) 年に「国道 6 号」に指定されてから 100 年の節目にあたることから、この国道 6 号の沿革を当時の写真と共に紹介する「**国道 6 号といわき**」を開催しました。国土交通省東北地方整備局磐城国道事務所に、昭和時代初期の写真を提供していただいたことで、より厚みのある展示となりました。



「国道 6 号といわき」展示の様子

国道6号は、面積の大きい当市においても、認知度に地域差の少ないテーマであったためか、館内で配布した展示のチラシを増刷しなくてはならないほど、多くの方に手に取っていただきました。

令和3(2021)年度後期は、市内の公園のうち、松ヶ岡公園・平中央公園・三崎公園について取り上げ、その沿革や関連するエピソードを多くの写真と共に紹介する「いわきの公園」を開催しました。

特に大正時代に設置された松ヶ岡公園は、幅広い世代が利用した思い出があるためか、家族で写真を指差しながら談笑する姿が見られました。



「いわきの公園」展示の様子



「いわきの図書館—はじまりから今へ—」展示の様子

そして、前回(令和4年度後期)の展示では、当館が令和4年で開館15周年を迎えたことを記念して「いわきの図書館—はじまりから今へ—」を開催しました。

展示の前半では、平成29(2017)年度に開催した、開館10周年記念企画展「いわきの図書館」を再構成して、いわき地域の図書館の歴史を紹介し、後半では、公式SNSの開始やいわき市立図書館キャラクター「かもまる」の誕生、電子図書館の開始等、当館開館から15年間の新たな試み等について紹介しました。

いわき市立図書館ホームページ「郷土資料のページ」では、過去に開催した常設展・企画展の情報や配布資料を公開しています。ぜひ、ご利用ください。



いわき市立図書館ホームページ TOP
<https://library.city.iwaki.fukushima.jp/>



年度ごとに分けて公開しています。

令和5(2023)年6月27日 発行

■編集・発行 いわき市立いわき総合図書館 

令和5年度 前期常設展
 「いわき総合図書館開館15周年記念 常設展の歴史」

■会期 令和5(2023)年6月27日(火) — 10月29日(日)

■会場 いわき総合図書館5階 地域資料展示コーナー